

4. 社会的活動

本学のラファエラ・アカデミアで社会人向け講座（「江戸文学散歩」）を担当。ここ3年に亘り、都内の名所散策の案内を行っている。その他、地方自治体主催のセミナー（山形県主催の『奥の細道』観光サミット）や、東京大学同窓会「银杏会」や首都圏内の公民館等のカルチャー講座（江戸の文化・風俗や近世文学に関する講座）の講師も勤めた。

石田 雅近

（英語英文学科教授）

1. 研究活動

【これまでの活動】

① 英語教育実態調査と改善の提言：英語教育の実効をあげられる方策を検討するために、昭和56年度から平成元年までの8年間にわたり文部省科学研究費を得て、研究会の副委員長として「大学英語教育に関する実態調査（I）－教員の立場－」、「大学英語教育に関する実態調査（II）－学生の立場－」、「早期教育・中学校・高等学校・大学の英語教育の実態調査」を全国規模で実施し、日本の英語教育改善のための提言を行った。この研究成果は昭和57年度、昭和59年度、昭和62年度、平成元年度の研究成果報告書4冊として刊行した。また、平成4年度と平成7年度には言語教育振興財団補助金を得て、「大学設置基準改正に伴う外国語（英語）教育改善のための手引き(1)、(2)」を作成し、大学設置基準の大綱化によって求められている「外国語教育改善」のための基準項目を作成した。

② 教材研究開発：国際化・情報化社会において実際のコミュニケーションの手段として有用な英語力を養成することを目的として、リスニングとスピーキングを重視した高等学校検定教科書の作成に携わった。まず、平成2年及び平成4年に発行されたWhat's New? I & II(東京書籍)の編集委員として、次いで平成6年及び平成10年に発行されたGo, English! I & II(東京書籍)の監修者・編著者代表として、編纂に係わり、これらの検定教材の有効性等について国内外で研究発表を行った。

平成2年からは検定教科書以外の教材の開発も手がけ、大学レベルのテキストの監修・執筆に携わり、その成果を10冊（『パラグラフ・リーディング』（朝日出版社）、『アクティブ・リスニング』（NHK 学園）、『公告に見る日米文化』（三修社）、『ステップアップ・リスニング教本』（金星堂）等のテキストを公刊している。

最近では、英語教育改善には「教員養成」が重要であるという認識に立ち、「英語科教育法」で扱われるべき教授内容について、国際応用言語学会世界大会（AILA1999）及び第9回 IATEFL Annual Conference（Ljubljana 2001）において、その研究成果を発表した。それを踏まえて平成10年には『英語科教育の基礎と実践－新しい時代の英語教員をめざして－』（三修社）を公刊して、その成果を世に問い、平成13年には改訂版を出版した。

③ 指導法研究：ビデオ教材の有効性に関する実証的研究を行い『英米文化』の第24号には「英語授業におけるビデオ教材の利用－現状と展望」、同第25号には「字幕付きビデオ教材の有効性と指導法」を発表した。また、『「オーラル・コミュニケーション B」検定教科書分析の共同研究を行い、その成果は『清泉英語教育論集』（第3号）の「オーラル・コミュニケーション B」検定教科書のタスク分析研究（第4号）の「オーラル・コミュニケーション B」検定教科書のインプット分析研究」に結実させた。さらにコンピュータを使用した外国語授業の改善と工夫の可能性について、清泉女子大学から平成10年度から2年間、教育研究助成金を得て、研究代表者として『CALL 教育システム導入の可能性と外国語教育改善に関する総合的研究』（共同研究成果報告書）をまとめた。

④ 語法等の研究：英語教育には欠かせない基本語彙の研究を継続している。特に、『学習指導要領』で規定されている語彙の研究を行い、その研究成果は平成4年の「基本語彙の選定」（『英語の指導法と関連科学』ニチブン）、昭和63年の「プロシード英和辞典」（福武書店）、平成6年の『ニュー・プロシード英和辞典』（ベネッセ・コーポレーション）、同年の『ブライツ英語辞典』（小学館）、平成8年『類似英語使い分け辞典』（東京堂出版）、平成14年の『新英和大辞典』（第六版）(研究社出版)、平成15年の『応用言語学事典』（研究社出版）に反映した。いずれも、編集には5年から10数年に及び、次の改訂に向けて今後とも継続しなければならない辞書が含まれている。

【現在の活動】

① 英語教員養成と研修：平成12年度から文部省科

学研究費を得て4年間の基盤(B)研究プロジェクトを立ち上げ、「現職英語教員の教育研修の実態と将来像に関する総合的研究」を行っている。これにより、海外の先進的研修プログラムと我が国の「5年次及び10年次教員研修」等を比較検討し、日本の公的教員研修の問題点を突き止めて、これからの望ましい研修プログラムを策定することが目標である。英語教員の資質向上の方策、手順、評価法も視野に入れている。また、平成13年度から2年間、文部科学省初等中等教育局教職員課から特別委嘱を受け「教職課程における教育内容・方法の開発研究事業」を行なった。研究課題は、英語科教育関連科目を中心として、修士課程における「教科に関する科目」と「教職に関する科目」の連携の在り方を検討することであり、2分冊の報告書を提出した。さらに、平成14年度から2年間、文部科学省高等教育局と初等中等教育局から『「英語が使える日本人」育成のための戦略構想－英語力・国語力増進プラン－』と『同 行動計画』の「英語教育に関する研究」を委嘱され、研究グループのリーダーを務めている。研究課題は、英語教員が備えておくべき英語力の目標値についてであるが、同時に英語教員に求められている「英語教授力」と「英語力」との関係性を考察し、日本人英語教員の持つべき「英語教授力」はどのような要素で構成されているかを明らかにすることである。今後の英語教員の方向性を決める重大な研究であると認識している。

② 教材研究開発：平成15年の「学習指導要領」改定により設置された科目「オーラル・コミュニケーション」の編著者代表として高等学校検定教科書の編纂に携わり、Hello there! I (東京書籍)を刊行し、採択初年度である平成15年度においては、採択部数1位を占めている。平成14年からリメディアル学習教材の開発を手がけている。国立メディア教育開発センターから委嘱されて、「デジタル情報テクノロジーの教育応用研究開発（高等教育のグローバル化対応研究）」のメンバーとして、e-learningにおけるドロップアウト軽減を重点目標に教材の開発及びその普及活動に尽力している。

③ 指導法研究：コミュニケーション運用能力の養成を目指した「学習者同士」と「学習者と教師(日本人教員&ALT)間」で行なわれる「インタラクション」(相互交流)の要素分析を行っている。

【今後の活動】

科研費補助金研究及び文科省委嘱研究は継続するが、特に、教員の教授力や指導力の向上に関連して、「コ

ミュニケーション指導技術」及び英語教員の「英語運用力を向上させるためのプログラム」に関する研究を拡大する。中期的には「大学における教員養成」及び「現職教員研修」についての新しいパラダイムを提示する予定である。さらに、初等教育段階における「シラバス」、「教材」、「指導法」の開発にも取り組む計画である。

2. 教育活動

① 学部

「英語学基礎演習」では現代英語の諸相というテーマで、使用頻度3000語レベルの語彙で表出される文について、言語規則や類推では処理できない特性を、明らかにすることを目標としている。受講者は図書館での活字資料を始めとしてインターネット検索や英語母語話者への質問・インタビュー等により収集したデータを基にプレゼンテーションをすることが要求され、学習者参加の「発見学習」の授業を実践している。「英語学演習」では、学生自らの英語習得経験や課題作文を中心に言語習得のプロセスを自己分析させ、英語習得促進・障害要因を解明し、書き言葉を中心としたコミュニケーションの問題を考えるワークショップ型の授業を行っている。教員免許取得希望者を対象とした科目の「英語科教育法」では、マイクロ・ティーチング、公開授業参観、教案作成、評価、チーム・ティーチング、動機付け、学習意欲の喚起、指導法の工夫等についてグループ・プレゼンテーション及びディスカッション形式中心に進めている。

② 大学院

「第二言語教育特殊研究」では4技能を修得するのに必要なコミュニケーション活動はいかにあるべきかを中心にform-based activitiesからmessage-focused activitiesをどのように融合させるかについて報告とディスカッションによる授業を行っている。「第二言語教育演習」は修士論文作成指導であり、先行論文の収集・検索に始まり、仮説の立て方、データ収集、分析方法、論述法等に関してコンピュータを援用しながらの個別指導となっている。言語文化の修士課程が発足して以来、10名以上がこの演習で修士論文を書き上げてきた。博士課程の「応用言語学特殊研究」では、「言語習得プロセス」と「教材開発」を中心テーマに、学会で口頭発表・研究論文発表が出来ることを目標に研究指導を進めている。毎年、全国レベルでの学会発表者を輩出している。英語教育を中心とした分野では、すでに1名が課程博士論文を書き上げ、審査を待つだ

けである。またさらにもう1名が論文執筆中である。

③ その他

清泉女子大学卒業を中心とした中・高・短大・四大の現職英語教員及び大学院修士課程・博士課程院生の寄稿による『清泉英語教育論集』を毎年1回発行し、平成15年度で8号に至っている。

3. 管理運営活動

① 大学院修士課程設置

平成3年度に修士課程設置設立委員を命ぜられ、学長を含め6名の委員により、長年の懸案であった大学院の設置に向けて大学院の全体構想、教育理念、カリキュラム編成、教授陣の検討にはじまり、入学試験システム、研究指導、修士論文作成に至るまでのプロセスと学則等の吟味を行なった。その結果、当初の予定通り平成5年度からの設置が認可された。

② 学科名称変更

既設科目の種類・数、教授陣の専門性、学生のニーズを顧慮して、実態に添うように、従来の「英文学科」から「英語英文学科」への学科名称変更を検討することが、平成5年4月の学科会議で決まった。それを受けて学科を代表して必要な文書作成ならびに当時の文部省高等教育局関係部署との折衝を行ない、平成6年度4月には正式に学科名称を変更することが認められた。

③ 英語英文学科のカリキュラム再編成

「英語英文学科」への名称変更後、カリキュラムの整合性をさらに推し進めるために、平成8年から11年まで学科主任として、1年次から3年次までの必修科目、選択科目の修得単位数の見直しを計り、再編成を実行した。

④ 大学院言語文化専攻の運営

平成13年度からは専攻主任として、大学院発足スタッフの停年・退任に伴って生じる欠員を、設置の趣旨を生かす形で補充し、また同時に統合すべき科目の整理を行なってきた。

4. 社会的活動

平成57年から7年間、「実用英語技能検定1級」1次試験記述式主観テスト採点委員、平成4年から3年間、「同 技能検定1級」の問題原案提供者を務めた。平成12年度には文部省生涯学習局長より「実用英語検定技能試験」審査基準検討委員会委員を委嘱された。平成元年から「NHK高等学校講座英語 II」の出演講師

を務め、現在まで15年間継続している。平成13年度に最高裁判所人事局から「事務官・調査官・書記官任用試験」英語出題委員を委嘱され現在に至っている。さらに、平成15年度には第19期日本学術会議の「教育学研究連絡会」の会員として認定されている。

学会・研究会等の活動としては、会員約2700名を擁する大学英語教育学会(JACET)に係わり、全国6支部に及ぶ45研究会を統括する研究会担当委員長を平成5年から平成14年まで務め、平成15年度からは研究会担当理事に就いている。また、学会紀要の査読委員を平成9年から委嘱されている。他には、第12回国際応用言語学会世界大会委員会委員(平成10年~12年)、語学ラボラトリー学会関東支部評議員(昭和58年~平成10年)、財団法人語学研究所研究員(昭和63年~平成14年)、英米文化学会理事(平成4年~5年)、現在では英語教育協議会同友会常任理事と同時に紀要査読委員も務め、平成15年度には「実践英語教育研究会」の会長として中・高等学校の現職英語教員と共に実践授業の研究を行っている。

大杉 正明

(英語英文学科教授)

1. 研究活動

英語学の守備範囲は広いが、通常「入り口」は「音」の研究で、私も音声学が研究の第一歩であった。私が勉強を始めた1960年代はアメリカ構造主義の考え方や手法がまだ支配的で、調音音声学と平行して音素論を勉強した。Daniel Jones から A.C. Gimson へと引き継がれたイギリス、特にロンドン大学を中心とした音声学と Kenyon & Knott, A.J. Bronstein, Hans Kurath といった人達のアメリカ音韻論が大きな柱であった。指導教官であった故高本捨三郎先生はミシガン大学から音韻論の研究で博士号を取って帰られたばかりで、先生の影響もあって、私も構造主義の信奉者だった。Lado, fries, Pike, King といった学者を擁し、"English Pattern Practices" を生み出したミシガン大学は戦後の日本の英語教育に恐らく最も大きな影響を与えたと言ってよい。私自身の関心は音の研究と言

語変種の研究だった。後者の中心は「方言」だが、*dialect* という語よりも *variety* の方が好ましい、という意見が出始めたのもこの頃である。専任としての最初の就職先である女子聖学院短期大学の「紀要」に書いた最初の論文は音韻論ではなく「言語」と「方言」に関するものである。これは現在ならば「社会言語学」の範疇に入る内容だが、当時は社会言語学というものが日本ではあまり知られていなかったこともあり、不勉強で研究書も読んではいなかった。以後しばらくは音韻論と形態論が研究の中心であった（その間、昭和54年に書いた"Stress Contours of English (1)" は研究社の「英語年鑑」で有望な論文として評価していただいた）が、私が30代後半の時に初めて辞書の編纂に携わったことが辞書研究に興味を持つきっかけとなった。和英辞典の編集委員としてゼロから約5年をかけてつくりあげ、後の改訂作業を加えると10数年にわたって辞書に関わった（その結果、百数十万部を売り上げる「プロシード和英辞典」を世に出した）。その過程で *lexicography* 「辞書学」という研究分野が存在することを知り、学問としての辞書研究に対する興味がますます高まった。「辞書」の研究には発音表記に関する「音韻論」、語や接辞の分類のための「語形成」「形態論」、語源を調べるための「語源学」意味定義や意味分類のための「意味論」、*formality* その他の指標による分類のための「社会言語学」、言語データ処理のための「コーパス言語学」、学習者用の配慮をするための「言語教育」の視点、のように言語研究の領域を総動員しなければならない。ある意味で言語研究の集大成と位置付けることができる。

英国の Exeter 大学には 辞書学で修士号、博士号まで取得できる講座があり、辞書学の権威 Reinhard Hartmann 博士がいることもわかった。1999年には Exeter 大学での辞書学の学会に出席し、二言語辞書について発表した。翌年には清泉女子大学より研究休暇を取り、Exeter 大学の客員教授として有意義な1年間を過ごした。2000年には私が委員長となり、清泉女子大学を会場として「国際辞書学セミナー」を開催した。イギリス、ヨーロッパを含む、国の内外からの研究者の出席を得て、盛況であった。ここまでが現在までの大まかな研究の流れである。ただし、ここで一言触れておかななくてはならない点がある。それは、「私自身の研究」と「教育上の必要性」の兼ね合いの問題である。今から20年ほど前まではゼミにおいても音韻論を中心にしていたが、理論的な音韻論でレポートや論文が書ける、あるいは書く意欲のある学生は数年に1、2名という状態であった。圧倒的多数の学生が「文学」

志向であったことも大きな理由だが、理論言語学が学生、特に女子学生の興味とは遊離した存在だった、と感じた。そこで、「言語研究」自体にたいする学生の関心を高めるために「言葉と性差」「広告の言語」といった、もともとは私の関心領域でもあった社会言語学の、「言語変種」のテーマを扱いはじめたところ、学生達の関心が高まり、多くの学生が履修し、レポート、論文を書くようになった。教育上の理由と相まって私自身の関心も高まったと感じる。当面、「言語変種」と「辞書学」を大きな研究の柱にしていきたい。

2. 教育活動

大学院は本年度に限り本来の講座ではなく、ベレント教授の代行をしているので割愛。

学部のいくつかの科目を紹介するにとどめたい。

英語学基礎演習 4

テーマ：人間・文化・社会との関わりからさまざまな種類の英語を学ぶ

授業内容：

社会言語学とはまさしく人間社会との関わりという観点からことばを研究する分野だが、この講座はその入門とも言えるものである。1年間に6つのテーマを取り上げる。1) 黒人英語、2) 言語と性差(男ことば、女ことば)、3) 敬語、4) 比喩表現、5) オノマトペ(擬音・擬声語、擬態語)、6) 広告の言語。「黒人英語」ではその歴史をビデオを見ながら検証し、文法や語彙の特徴をゴスペル、ブルース、ロック、ジャズ、ラップなどで検討する。「言語と性差」では日本語と英語との比較、*feminism* と性差別語との関わりなどを考える。「敬語」、「比喩表現」、「オノマトペ」では主に日本語と英語の比較をする。「広告の言語」では主にアメリカの雑誌における広告の英語を語法上分類する。

学生は二人でペアーになり、それぞれのテーマについて調べ、発表する。この授業形式を喜ぶ学生が多いのに驚いた。配付する資料の準備や発表でのCDやビデオの使用など、工夫もよくしている。ただし、口頭の発表における言葉使い、リーダーシップその他はまだ未熟で幼稚な感がある。

英語学入門

テーマ：英語という言語の成り立ち、構造、人間社会との関わりを考える

授業内容：

まずは、英語学とはどんな学問分野で何をするのかを紹介する。次に、英語の成り立ちを考える。英語が

たどってきた歴史を大きな流れに分けてたどる。Old English, Middle English, Modern English から Present-day English にいたるまで、英語英文学科に入った学生として英語がどこでどのようにして起こり、今日の姿になったか、概要だけでも知る必要がある。英語の構造については、文の単位の大きな構造と語の単位の小さな構造について考える。次は「意味」について考える。「音声・発音」については「英語音声学」という授業があるので本講座では扱わない。次に「応用言語学」と呼ばれる分野について紹介する。主に「人はどのようにことばを覚えるのか」ということを考える「言語獲得論」と人間社会との関わりという観点からことばを研究する「社会言語学」を取り上げる。

この授業は必修なので、他学科からの教職課程の学生を含めると 160 名が履修している。授業は基本的に講義形式。英語と日本語のバイリンガル講義である。後期からは数人のグループに分けて調査・発表をさせる形式を試みる予定。数年前までは前期、後期 1 各 1 回の試験であった。試験の範囲はかなり広がる。全体的に学生の学力が落ちていることもあって、落第する学生が数十名いた。そこで、負担は増えるが、各章毎に試験を行なうことにした。学習効果もあがり、落第する学生も大幅に減少した。しかし、採点の負担は大変である。

Communication Skills 2

テーマ：英語によるコミュニケーション能力、特に「書く」、「話す」能力を高める。

授業内容：

ある程度まとまった内容を伝えるにはきちんとした「文」がつかなくてはならない。そのためには文をつくるための「文法」が必要だ。そこで、授業の半分は正しい文の作り方を学ぶ。残りの半分は「書く」練習と「話す」練習である。隔週で英作文の課題を出す。さまざまなテーマについて書かれた英文を用意するので、それを手本にして短いエッセーを英語で書き、提出すること。毎回それを添削して返却する。また、隔週でそのエッセーをもとに短いスピーチをする練習をする。また、英語力をつけるために欠かせない語彙力強化も行う。授業は基本的に英語で行う。

これは本当に大変な授業である。もうやめたいと思うこともしばしばある。去年までは毎週英語でエッセーを書かせて提出させ、添削して毎週返し、ひとりずつコメントして指導していた。添削とコメント作りに毎週ほぼ 6 時間ほどかかった。ひとつの授業にこれほどのエネルギーを取られるとは考えてもいなかった。学生達は直接自分が書いた英語を直してもらえ

で非常に喜んだ。そんなにたくさん書かなくてもよい、と言うほど書く学生も少なくない。年度の終わりには「英語エッセーコンテスト」をクラス内でおこなった。優秀者に英語学習書や文房具の賞品を用意したが、結局可愛そうなのでクラス全員に賞品を出した。

スピーチなどは要領が悪くうまくないが、実に見事なエッセーを書く学生の発見もあり、私にとっても有意義な授業であった。今年はいあまりの負担に音を上げ、エッセーの提出を隔週にした。隔週でスピーチをさせ、文法力と語彙不足を補うためのテキストを使用している。この授業をすると学生達の英語力が手に入るようによくわかる。是非同様の授業をもっと増やす必要があると痛感する。英語力を本当につけていくためにはこのような地道な努力を強いるような授業が欠かせない。しかし、誰にお願いしたらよいものだろうか。

3. 管理運営活動

4 年前に「入試広報センター」が発足すると同時に「センター長」を仰せつかった。イギリスでの研究休暇が終了すると同時であった。初めてというのは何事も大変である。センター所属の職員の方々に適切な指示などでできないセンター長であった。今後のために申し上げると、海外に研究休暇で行っている教員に大きな役職を依頼するのはどんなものか。立場上断りにくい。帰国後は研究をしばらく継続したいところである。役職によっては前年度中の経過の理解が必要な場合もある。家族で 1 年間海外に行った場合、帰国後しばらくは種々の雑用に忙殺される。大まかに言って、以上のような理由である。ご一考いただきたい。結果的には、この仕事をしたことで、入試と広報を通して大学全体を眺める機会になり、それまで見えていなかった点に配慮できるようになり、新しい視点を得た。職員の方々と親しく協力して仕事をしたことも極めて必要な経験であった。支えていただき、多くを学んだ。職員の方々に感謝したい。皮肉な言い方だが、教員全員が一度はこの仕事をすべきだと思う。全員に回るまで存続するだろうか。

4. 社会的活動

約 20 年前に初めて NHK のテレビの仕事をした。高校生向けの「英語表現入門」という名前であった。それから 4 年間ほど散発的にテレビの英語番組を担当した。恐らく最大の社会的活動は 1987 年から 1998 年ま

で11年間講師を担当した「NHK ラジオ英会話」であろう。これは戦後は「カムカム英語」の愛称で知られた、歴史と伝統を誇る番組である。日曜日を除く毎日放送されている。毎月80枚前後のテキスト原稿を書き続けることは今考えても不可能と思える仕事であった。しかし、おかげでいくつかの大きな収穫を得た。毎年番組のための取材で英語圏、主にアメリカに行ったことで「今」の英語に接し、文化的にも最新情報を得ることができた。語学の教員には必要なことだと思う。年間600万部を売るテキストを書き、日本中の聴視者に向かって話すことは、自分の英語力（と日本語の力）と知識、話術などが試されることになる。それだけの「英語学習者／研究者」（実際に聴視者の中には英語の教員が多い）の厳しい目に自分自身をさらすことは大きな試練であると同時にいろいろな意味で成長する大きなチャンスでもある。日本語だろうと英語だろうと一つでもミスをすれば抗議、批判、叱咤の電話や手紙が殺到する。おかげで原稿の校正に対する集中力は大いに鍛えられた。入試問題の数倍ある分量の原稿の校正を毎月、11年間行って、誤植のミスは2箇所であった。また、この十数年間で行った講演は200回を越えた。中学・高校の教員の研究大会は全九州、全北海道、関東甲信越とほぼくまなく行った。YMCA 創立100周年記念講演会を北海道の網走、北見から沖縄まで行った。語学学校、市民団体、企業（NEC、松下電器、その他）、そして大学（フェリス女学院大学、津田塾大学、東京女子大学、桜美林大学、明治大学、明治学院大学、獨協大学、同志社女子大学、京都外国語大学など）でも講演を行なった。大学英語教育学会の東北支部研究大会（2001年）、外国語教育学会世界大会（FLEAT）（2000年）などで講演したことも名誉なことであった。蛇足だが、現在NHK教育テレビの「いまから出直し英語塾」の講師を務めている。

高田 恵利子

（英語英文学科教授）

1. 研究活動

ジェイン・オースティン、メアリー・シェリー、プロ

ンテ姉妹、ジョージ・エリオット、クリスティナ・ロセッティ、ミュリエル・スパーク、エミリー・ディキンソン、キャサリン・ノリス、J. K. ローリングなど、女性作家による作品、詩歌や小説を軸として、18～21世紀のイギリス・アメリカの社会における女性の特性とその役割の意義などを研究する。ヨーロッパの合理主義思想がプロテスタント主義を通じて、近代社会の進歩と成長を成し遂げているが、このような女性作家たちによって、各個人の自我の見直しが描かれて、新たな方向性が求められている。

この数年間に、主に、詩人クリスティナ・ロセッティの詩歌を通じて、男性中心の社会における女性の生き方や地位などを調べ、その過酷な環境にも拘わらず、女性特有の限界や弱さを克服して、雄々しく生き抜いた点をキリスト教的な側面から探る。とくに、当大学のキリスト教文化研究所年報を通じて、これまでに、クリスティナ・ロセッティの詩歌に関する七つの論文を仕上げ、発表をする機会を得ている。

不安定な現代社会にあっては、スコットランド出身のカトリックの小説家ミュリエル・スパーク、サウス・ダコタ出身のプロテスタントの詩人キャサリン・ノリスなどによって、善悪の概念と言われる二元論的な思考方法によらずして、すべてが神の秩序のもとにあり、その恵みに浴することができるといふ見方が提示される。女性特有の鋭い直感による洞察のもとに、現実の把握と同時に、神秘的な体験が観察されるので、このような女性作家たちが描いた人間観やキリスト教的思想についても研究をおし進める。

2. 教育活動

低学年の学生たちには、英語の運用能力を培うようにこころがけている。若者が好む作品、ハリーポッターのシリーズなどをテキストとして取り上げて、読解力を深め、また、映画などのビジュアルな手段を用いて、学生の関心や興味を喚起するように努めている。

上述の研究活動について述べた女性作家たちの作品において、過去の女性たちが生きた姿がどのように語られているかを観察し、洞察することによって、現代の若者である学生たちの考えやそれに対する反応を確かめ、また、ともに対話し、思考する所存である。教材はいろいろな本のコピーを作成して、ビデオなどの視聴覚の教材も用いつつ、教科書を一切使用しない授業形式にしている。また、人間論 II、ボランティア講座、総合講座 II などを通じて、他学科の学生たちを知り接する貴重な機会を大事にしている。

上級年次の学生たちには、比較的理解しやすい英語で書かれた、ジェイン・オースティンの小説を原書講読し、テーマに添って分析研究する。また、最近放映された映画やBBCのテレビ番組などを用いて、学生たちの英語の聴解力を高めるように力を注ぎ、授業ではできる限り、英語での授業を行っている。学生たちの独創性を培うような授業の運びを常に心がけ、発表形式を含めて、種々の試行錯誤を行っている。但し、演習であっても、時には、70名以上いるクラスもあるので、講義形式になることもあり、非常に苦勞をしているのが現状である。

前に述べた女性作家たちによる作品を理解することによって、当時の人々が如何に語り、何を考え、何ゆえに行動するのかを学生たちが見極めて行くように仕向けるが、とくに、登場人物の女性たちが真の人間性へと目覚め、人格形成を成し遂げる課程について焦点を絞っている。また、感性豊かな学生たちとの対話を貴重な体験の基盤とする。

少人数制による研究法演習において、英語の習得や勉強、および、論文とレポート作成の方法について、指導を行なっている。また、就職活動に支障が無い限り、夏のゼミ合宿を実施する努力をしている。とくに、個人的に学生たちと親しく交わり、また、学生たちにも、友だちと交わる良い機会となっているので、実行すべく努めている。

大学院の授業においては、とくに、院生のイニシアティブを尊重して、授業のためのテキストなどは学生たちの興味の範囲や研究の必要性に応じて行っている。そのために、私自身の研究の分野も広がりを見ることができて、とても幸いなことと感謝している。

課外活動としては、聖歌隊の顧問であるために、いろいろな手段を通じて尽力し、週3回の昼休みの練習時間にはなるべく出席し、また、夏の合宿にも参加するようにこころがけている。その他、始業の集い、終業の集い、創立記念日やクリスマス・ミサなど、学校の行事には、学生たちと一緒に参加するよう努めている。

3. 管理運営活動

英語英文学科の主任の職務を担当して4年目を迎えている。本年には、前年度行われた公募の結果、二人のすぐれた専任教員を迎えることができ、非常に心強さを覚えている。

シラバスの作成については、専任の教員の賛意を得て、当学科の特色を出し、充実さを増すように努めて

いる。とくに、英語のレベルが低い低学年の学生たちのために、外国語として、英語を選択必修することを課すシステムを導入しているが、その運用の仕方にこれからの改善の余地がみられる。また、3・4年次向けの講座には、多くの学生が殺到するが、4年次を優先にする教員が多く、3年次が初めから排除されていることには、多くの不満や問題がみられ、とくに、当学科の講座を増すか、定員数を減少させるかの問題の解決策が課題となっている。

近年になってからは、学生の英語の運用能力を増すことに心がけ、とくに、海外の語学研修の講座を増し、また、非常勤の教員の協力をえて、英検・TOEFL・TOEICなどの講座を設定することができた。とくに、海外語学研修については、年に一度は、語学研修の場に専任の教員が訪問を行うことにより、現状が把握でき、それなりの改善の方法を取ることが可能である。

また、学生の創意を促すようなミュージカルやスピーチコンテストなどの演習の授業には、年に数回の発表の場を提供し、学外の教師をジャッジとして招待してきている。

専任教員の協力を得て、希望する学生のために、留学制度が円滑に行われ、学生たちの語学のレベルの上昇と国際的な視野の養成の一助となっている。また、問題を抱えた学生や留年生については、学生たちの父母との連絡を、必要に応じて行うように努めている。

学科の運営の面では、専任と非常勤の先生方とのパイプとして、できるが限り努めてきている。年に一度、一年と二年次の英語担当の常勤および非常勤教員との出会いの場、意見の交換の場として、昼食会を企画して来ている。その際に、先生方の教え方について話して頂き、また、問題のある学生を発見し知る機会となり、また、くつろいだ雰囲気のもとに、よい人間関係を作るように努めている。

4. 社会的活動

できる限りの範囲において、まわりの地域社会との融和をはかるべくつとめている。具体的には、フィリピンの体験学習を企画し、隔年の夏ごとに学生たちに同行している。

アラン・J・ターニー

(英語英文学科教授)

病気療養中のため、執筆を依頼せず。

中尾 セツ子

(英語英文学科教授)

1. 研究活動

研究の軌跡

私はキリスト者として、日本の英文学者が見逃しがちな、あるいは避けて通る、イギリス文学におけるキリスト教と文学の関係に着目した。まずキリスト教の影響がもっとも直接的であった中世文学に着目し、代表作 *Sir Gawain and the Green Knight* に見出されるカトリック的要素の意味を探った。次のルネッサンス文学では、Shakespeare に見られるキリスト教的な人間観、世界観を研究し、彼の作品が一通りでは見逃しがちな深い意図を見出そうとした。たとえば、Shakespeare が描く‘父親’にしても、彼の概念は、天の父、つまり神につながっていて、神不在の世界の‘父親’のイメージとは異なる要素を多分に秘めている。この概念の違いをルネッサンス文学の代表的な作品を扱って論じてみた。さらに、20世紀文学の中ではキリスト教作家がどのような人間観を抱き、それをいかに効果的に表現しているかを研究した。その中でファンタジーという作法でキリスト教の価値観を表現した作品に関心を持って研究してきた。

研究の現在

二十世紀のキリスト教作家、C. S. ルイスのファンタジーによるキリスト教思想の表現法を研究しているが、最近出版され始めたルイスの書簡集は全集に近いので、現在は作者自身の書簡に関心を寄せている。書簡はルイスが幼いときからの半世紀にわたる膨大なものであるが、少年時代の読書体験、交友関係、学校生活などについてのつまびらかな記録ともいえる資料

が得られるので、この書簡集を読みながら扱う品を研究することはルイス研究には不可欠と考えている。書簡を読むと、作品との関係が一層明らかになり、これまでに読んできた作品についてより深い理解が得られる。これまでの拙論では論じなかったこと、気付かなかったことなど、書簡を読むことは私の研究に、多くの刺激を与えてくれている。キリスト教的背景を持たない日本においてキリスト教の伝統の中で生まれた文学の解釈をもっと深める必要があると痛感しており、その一端を担うところに自分の使命を認識している。

今後の計画

ルイスの自叙伝、自叙伝的創作、書簡などの関連性に関心を持ち、読書を進めている。書簡は直接にルイスの思想・感情を伝えているので、彼の他の作品にそれがどのように生かされ、表現されているかを研究したいと思う。

同じ二十世紀キリスト教作家 J.R.R. トールキンはルイスの友人であり、二人は互いの創作を読み合い、批評し合った。しかし二人はまた非常に異なる性格でもあるために、トールキンの作品はルイスとはまた異なる魅力を持っている。彼が壮大なビジョンで描く世界観にはキリスト教的要素が濃厚でありながら、幾層ものレベルで読まれている。日本においても彼の作品が、その意図したレベルで理解され、楽しまれるように私自身の研究を深めたいと思っている。

2. 教育活動

授業においては、「イギリス文学入門」、「イギリス文学史」などの講座名であるが、単に文学の概観や歴史を語るのではなく、その基盤となっているキリスト教伝統に気づかせるようにしている。清泉女子大学はキリスト教精神に基づく大学であるから、学生には学問を通してこの精神を学んでほしい。イギリス文学はそのためにはまさに絶好の資料であり、宝庫であると私は確信しているので、文学を読んで英語力をつけることと、先人たちのすぐれた思想を学ぶことは学習の2本の柱であると考えている。キリスト教に関するある程度の知識と理解、共鳴を持つての講座であり、これなしには文学の学習、研究も上滑りするか、浅い学問、あるいは核心を無視した単なる分析に墮してしまうと思う。

ルイスやトールキンを学習する学生には、拙論や、私が翻訳に携わった関係書などを、レポートおよび論文作成の参考書として紹介し、その他の関係書につい

てもかなりの助言を与えることができる。

以上の確信に基づき、私は自分の研究対象である Shakespeare、C.S.ルイス、J.R.R. トールキンなどの作品を、キリスト教作家として学生に紹介し、共に読みながら、学生たちが英語力をつけ、文学の醍醐味を味わい、文学に親しむ習性を獲得できるように指導することが私の使命であると考え、そのように努めている。

毎年、これらの作家で卒業論文を書く学生が輩出し、大学院においてもそれが続いている。またルイス関係の博士論文作成中の卒業生もいる。学内には、学生を中心としてすでに 25 年以上の歴史を持つルイス研究会、「ナルニア・サークル」があり、私はその顧問を務めている。毎週ルイスの作品を読む会は、学生、院生、卒業生までも参加し、ルイスの作品の魅力が実証されている。

3. 管理運営活動

本学の評議員、理事として：理事長、学長の方針を理解し、学内における建学の精神の涵養に努め、授業において、特に 1 年生全員対象の「人間論」において、学生たちにこの精神を説明している。その他の授業、学生とのかかわりにおいても、建学の精神を意識し、大切にしている。

本学の管理運営に関しては、理事会、常務理事会において、清泉女子大学がその特徴を十分に発揮した大学であるためにどうすれば、この精神が教職員間によりよく理解され浸透していくかを模索している。教職員が本学の精神を理解し、受け入れ、協力する姿勢がもっとあればよいと思う。そのためには特に就職の始めにこれについての解説があつてよいのではないだろうか。

4. 社会的活動

およそ 20 年前に同士と共に「日本 C.S.ルイス協会」を設立し、これに所属している。この会の運営委員として毎年の集会は主として清泉女子大学を会場として開催している。ここでこれまでに数回、講演、研究発表をおこなった。また、本学院生、卒業生たちに発表の機会を与え、指導してきた。

エリック・A・ベレント

(英語英文学科教授)

特別研究期間による海外在留中のため、執筆を依頼せず。

齊藤 悦子

(英語英文学科助教授)

1. 研究活動

研究歴としては、周縁的、批判的視点から支配的なキャンノンに挑戦し、意図的に多重構造を持つ文体の力で時代の潮流を変えるほどの影響力を同時代の文壇に与えた作家として、19 世紀のマーク・トウェイン、20 世紀のトニ・モリスンを研究してきた。トウェインについては、最大の問題作である『ハックルベリー・フィンの冒険』を中心に研究し、特に 1940 年代からの再評価期以降の批評史をふまえた上で、受容論の立場から作品を検証し直し、新しい視点を示すことができたと思う。また、モリスンについては、単に多文化主義的な立場からの批評になることを慎重に避けながら、むしろ、敵意ある評者が問題にした部分を掘り下げ、支配—被支配の想定されがちな展開を裏切って、ヒューマニズムそのものにさえ不穏なゆさぶりをかけるその独特な文体について、『ピラヴド』までの作品の中で体系的に論じてきた。現在はそれ以降の作品について論考している。また、翻訳などの活動では、現在フレデリック・ジェームソンの近著（モダニズム論）の訳に取りかかっている。今後の計画としては、まず、この翻訳をまとめながら、平行して、この作業を通して得られた洞察を、再びトウェイン、モリスン研究に還元して行きたい。

2. 教育活動

4 月に清泉に移ってからのこの 2 ヶ月ほどの報告：ここでは、200 名近い受講者となったアメリカ文学特

殊講義と、14名で行っている研究法Ⅰを例にあげて、大人数の講義で文学を教える上で行った工夫と、少人数のゼミで文学を教える時のアプローチで、今のところ効果の上がっている方法について述べてみたい。

まず、特講の方では、授業内容以外にも、①出席を取っていると、時間ばかりかかり、クラスの雰囲気はだれる ②240人収容の大教室のため、一方的な講義だと、後ろの方は「お客さん」になりがちである ③文学の授業にはかかせないディスカッションができない、などの問題点があった。

①の問題については、出席はとらず、毎回、授業の終わりに、その日のテーマについて意見を求めるリアクション・シートの提出を義務づけ、これを提出して初めて出席とみなすことにした。この方法で、代返、途中退場、座っていただけ、という不真面目な参加はできなくなった。これは②の解決にも貢献し、集中力の向上に寄与した。また、③についても、教員が学生の感じたことを受け取り、誤解の多い点については次回授業時に補強し、また、必ず、全部読んで、いくつか問題提起にふさわしい意見をプリントに編集し、そこに整理した講義の要点を併記することで、学生は、「自分の意見は反映されている」という参加の感覚を持つことができ、毎回、非常に張り切って、A5サイズのリアクション・シートにびっしり意見を書いてきている。

しかし、リアクションをよくするためには、もちろん、「興味の持てる授業にする」という前提がある。今回、登録人数が増えた理由のひとつは、テーマが「児童文学」であったためだろうと思われる。「児童文学」というのは、あるいは、かわいらしい、ほほえましい、女の子受けする題材として、中には気分や趣味で受講を決めた学生もいたかもしれないが、この講義は歴史的社会的背景の中で、学問的に時代を画した3作品をとらえていこうという試みであったため、学生たちの固定概念をゆさぶるところからアプローチし、講義要項にもそのようなものになる、と予告した。いわゆる「子どもの発見」というジャンル成立のための思想史的背景を、17世紀の絵画や、ロマン派の思想、ペローの昔話などを例に話すことから導入した第1回はかなり手応えがあり、多くの学生が「斬新で興味が持てた」と書いていた。この授業の場合、このように、もともと学生たちが関心のある分野をテーマにしながらか、あまり考えたことのないような批評的視点を提示することで知的好奇心をくすぐり、かつ、意見を書かせることで、集中力と参加の感覚をたかめることができたように思う。

この方法に問題点があるとすれば、教員側の負担の大きさである。リアクション・シートの評価・管理はかなりハードだが、フィードバックなしで授業を続けるより、自分の授業がどの程度学生に届いているかという直接の感触を得られる貴重な資料であり、また、試験を待たずして、すぐ次の授業で足りない点などを補えるため、教える側にも実りは多い。ただ、ねがわくば、100人くらいの規模に押さえられるとより充実したやりとりができるのではないかと思う。

次に小人数でやるゼミでの文学の演習の実践例をあげる。研究法Ⅰは3年に文学で論文を書くイロハを教えるゼミであるので、何よりもまず、文学作品の中に「問題意識」を持ってテーマを見つけていく練習をしたかったと考えた。とにかく、学生自身に何かを「解き明かした」という感覚を持たせたいと思った。そこで、解釈の難しい作品を全員で読み、全員の意見を出すところから始めた。はじめは首をひねっていた学生も、クラスメートの意見に啓発され、対話の中で、鋭い視点が出てくるようになった。

ゼミは、やはり、このように全員にひとわりその場で意見を聞いた上で、さらに、それを対話的に深めていくだけの時間が必要になってくる。この方法が現段階で成功しているのは、14人という受講者の人数に負うところが大きい。20人ほどになると、おそらく、それぞれの意見がばらばらに出たところでタイム・アップになりかねず、20人を超えた場合は、全員に公平に時間を割り振ることも危うくなってくる。学生は自分の意見をのべ、クラスメートの意見を聞きながら、高揚感を得るとともに、知的な競争心も持つようになり、自分も周囲に負けないような意見を言いたいと思うようになってくる。この授業でも、全員に意見をだしてもらうことで、早い段階から宿題への取り組みが非常に熱心になった。英文の3年生は、就職活動に翻弄される前の、一番学問に対して落ち着いた探求心が高まる時期に、どうしても、人数制限のクラスでは4年に優先順位をとられて思うように履修できないハンディがある。せめて、このような3年生単独のゼミにおいては、その日頃の不満が解消されるような学習環境を用意してあげられたら、と思う。

3. 管理運営活動

学生生活委員会、ハラスメント委員会、国際交流委員会で、諸先輩に教わりながら、活動している。

4. 社会的活動

昨年度の八千代市における公開講座では、ことばがどのように各国独自の文化であるかというテーマを「究極の翻訳マシンはなぜできないか？」というキヤッチフレーズのもとに講演した。

まず、お国柄による縁戚関係の呼称（英語は日本語よりも年齢の上下を表現する語彙が少なく、中国語は逆に男女、年齢、父方、母方などを細やかに限定する）を比較し、また、日本語の「雨」、イヌイットの「雪」、モンゴルの「馬」の様態を表す語彙の中に風土と語彙の関係を見ていった。次に自分のアメリカ留学中のエピソードも交えながら、敬語の文化を持つ日本と *frankness* が社交辞令となる文化を持つアメリカの、対人関係の場面での挨拶のさまざまな実例をあげ、一般的に日本人は内気でアメリカ人は明解だと言われているのは、別に性格的、あるいは表現能力的な問題ではなく、人間関係の文化の基盤が異なるのであり、自国の文化の人間関係に適応するように訓練された者が、異なる基準の文化に触れたときに、どのようにとまどい、どのように同じことばでも異なって受け取るか、という話しをした。また、とぎすまされたことばの芸術ほど当該言語以外に訳して理解することは困難で、俳句や落語がいかにか訳しにくい（「てやんでえ、ちちとら江戸っ子だい！」→ “What are you saying, I was born in Edo” ??）を考えた。

このように翻訳不能な文化的存在としてのことばのあり方を喚起してから、いくつか名誤訳?の例を話し、翻訳という技が、単に辞書を引くだけでは成り立たない文化の調整役である点に触れ、そのあとは、字幕翻訳の「名人芸」の例と、意味内容よりも気分の表現としてどの文化でも非常に発達している罵倒語が、どのように訳出される／されないかという話をし、講演をまとめた。

受講者は概してとても熱心で、質問も数多くあり、学生時代に意識を注意されて直訳に直された経験を持つ70代の受講者からは、「あのとき、私は間違っていなかった。今日は仇をとったような爽快な気分になった」という感想も聞かれた。

長沼 君主

（英語英文学科専任講師）

1. 研究活動

これまで言語学習における動機づけの研究を中心として行ってきたが、心理学と応用言語学の両側面から理論的に検討し、言語学習動機づけ尺度を開発する中で、実証的なデータをもとに研究を進めてきた。現在は尺度の精緻化を進めるとともに、動機づけのプロセスやメカニズムの検証を行い、診断的な尺度の開発を目指している。今年度は文部科学省の指定する *Super English Language High School* のうち1校に協力し、動機づけ尺度を実施する予定だが、外部の英語テストスコアや授業実践との関連の検討が期待できる。また、現在、都内私立の中高一貫校での中学・高校全学年のデータも分析中であり、これらのデータとの比較検討もしていく予定である。今後もこのような現場とかかわった形で研究を進め、実際に教育の役に立つ診断尺度の開発を行っていきたい。

また、その他の研究としては、リーディングにおけるテキストの読みやすさと速読力の研究をコーパスやテストングの視点から行ってきた。現在、速読を支援し、速読力を測定するソフトウェアや、語彙頻度などを計測しテキストの読みやすさを評価するソフトウェアを開発し、CALLの授業などで運用しているが、今後も学習者のレベルに応じたリーディング教材のデータベースを作り、自律的なリーディング学習を支援する環境を作るなど、理論面だけでなく、実用面での研究も進めていきたい。

2. 教育活動

英語スキル科目では、CALL教室を利用し、独自に開発したウェブベースのソフトウェアを用いた速読のトレーニングを行っている。具体的にはスラッシュでチャンクごとに区切ったテキストと対応する箇所部分訳を順次表示していき、直読直解をさせながら、WPM(1分間に何語読めるか)を計測している。また、設定した速さで自動的にチャンクを表示していくなどの方法を併用し、読みの自動化と速読力の向上を目指している。

演習科目では、英語学基礎演習では、応用言語学の概説書を章ごとに担当グループに発表してもらい、レジュメやプレゼンテーションの内容や形式についてお

互いに評価させ、応用言語学に関する基礎的な知識を身につけるだけでなく、基本的なプレゼンテーションのスキルを身につけることも目的としている。また、英語学演習では、応用言語学で興味のある分野のレビュー論文をペアで担当し、同様の形式での発表と相互評価を行っている。基礎演習と比べると、背景知識を補うため関連書籍などを調べたり、参加者からの質問を調べたりすることが求められる他、1回に1本のレビュー論文を読み進めていくことになるため、より高度な内容となっている。後期には個々の興味を持った分野のより発展的な知識を得るため、レビュー論文ではなく、具体的な研究事例を扱った論文を読ませていく予定である。

3. 管理運営活動

今年度は図書委員会と一般外国語科目運営委員会に所属しているが、前者においては、データベースの運用実態について把握し、効果的な運用方法を図書館側と考えていきたいと考えている。また、後者に関しては、英語のプレイスメントテストに関して、組織だった運営を行い、データの分析なども含めて、より効果的な運用を考えていきたい。

4. 社会的活動

ここ数年、ベネッセ・コーポレーションの「英語コミュニケーション能力テスト」の企画、開発に参加している。また、ベルリッツと共同した社会人向けのコンピュータ版英語コミュニケーション能力テストの開発にも協力している。その他にも、同じく、ベネッセ・コーポレーションの児童向け英語教材「BE-GO」の開発や、アルクから独立したコスモピアの、ウェブ上の英語学習サイトの開発にも協力しており、専門知識を用いてテストや教材開発に貢献している。専門知識の上では、去年に引き続き今年度も、ロータリー財団の国際親善奨学生英語面接官を務めたが、今後も継続して協力していきたい。

また、昨年からは、東京外国語大学の21世紀COEプログラムのTUF言言語モジュールの開発にも参加し、17言語のウェブ上の学習教材の開発に協力したが、そこでは、主に、発音モジュールや会話モジュールの学習モデルの開発などを担当した。これだけの多言語によるe-learning教材の作成は例にない試みであるが、今後も語彙や文法モジュールの開発も控えており、継続的に協力をしていきたい。

この他にも、文部科学省向けに語彙診断プログラムを開発したり、東京外国語大学の高大連携プログラムの一環として、文法診断テストのプログラムを開発したり、プログラミング技術を活かした貢献も行っている。

杉山 晃

(スペイン語スペイン文学科教授)

1. 研究活動

大学院修了後、最初に書いた論文はメキシコの作家フアン・ルルフォについてのものであった。「フアン・ルルフォの短編小説における死と罪」と題されたこの論考は、「津田塾大学紀要」(第18号)に掲載された。その後も、ルルフォの作品を中心に研究を進め、親子の関係性についていくつかの論文を書いた。

ルルフォは荒涼とした風景のなかで、暴力や死や宿命をえがいた寡作な作家である。生涯に一冊ずつ長編小説と短編集をのこした。それらの作品を教室で講読の教材として使ってきたが、翻訳も同時に進め、『ペドロ・パラモ』は岩波書店、『燃える平原』は水声社からそれぞれ刊行された。

ルルフォがひと区切りついたところで、ペルーの小説家ホセ・マリア・アルゲダスの研究にとり組んだ。アルゲダスは、白人系だったが、子どものころ、アンデスの先住民であるインディオたちにまじって育った。そのため、インディオの文化と西洋の文化のあいだで宙づりになって苦しんだ。彼の自伝的な作品には、その体験と苦悩が表白されているとともに、先住民の感性や精神世界がみごとにえがきだされている。

この十数年はそうしたアルゲダスの研究にとり組んできた。とりわけ『深い川』にひそむ死への憧憬について、あるいは『ヤワル・フィエスタ』におけるアンデスと西洋の対峙について、いくつかの論文にまとめた。また、これらふたつの長編も翻訳した(現代企画室)。現在では、アルゲダスのすべての短編を訳しており、その半数は先だって刊行されたところだ(彩流社)。